
尖角の超短編集//第二弾！！

尖角？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尖角の超短編集／／第二弾！！

【Nコード】

N4422U

【作者名】

尖角？

【あらすじ】

短編の小説から詩からなんやらまで、いろいろと作者が暇なときにあげていくものです。

ちなみに、1つ1つに関連性は全くないです。第二弾です（^^

あなたに捨てられた私に、どうか無償の愛を捧げて下さい。（前書き）

第二弾です。

前作が好評だったわけではありません。
けれど書いていきたいです。

前は10話だったので、今回は20話ということで……
今回は小説をメインにしたいです。どうぞ……！

あなたに捨てられた私に、どうか無償の愛を捧げて下さい。

『元カノなんて言わないで？』

私はそう、切に願う…。

私が振られた理由は“お節介”だから…。

彼にとって私は鬱陶しい存在でしかなかったらしく、私は付き合ってから半年で振られた。

私が尽くした総てが邪魔なものでいかなかったなんて…。

そう知った時の私は一体どんな顔をしていたのだろうか？

そう思うとまた悲しく思う。

振られた当初は“辛い”という言葉しか出てこなかった。

けど今は違う。

無しか思わない。

良かれと思ってしたことがダメだってわかった時、

尽くした人に毛嫌いされた時、人間という生き物はいとも容易く崩れ落ちる。

他の人なんて知らない。

ただ自分はそうだった。

今はもう、彼のことを思い出したくもない。

彼は私を見捨てた。

理由はウザいから。

ただそれだけ…。

悲しいなんてレベルじゃすまなかった。

もう人生が終焉を迎えたと思った。

私はそれぐらいにひどく糺^{やっ}れ、涙を流し続けた。

嘘でもいいから「好き」だと言ってよ。

例えばあなたに他がいても、私は何も言わないから。

だから私をお願い傍においてよ。

愛さなくてもいい。

愛なんていらないから…。

私に捧げる笑顔じゃなくても、それが見れば私は満足だから。

泣かないでいられるの。あなたが傍で笑ってくれるなら。

悲しくなんてないの。ただ少し切ないだけ。

だからいけないで？おいてかないでよ？

私にはあなたしかいないのだから…。

これだけ言ってもあなたは振り向かないの？

それは愛？それとも嫉妬？

私がかawaiiすぎるから？それとも私が憎いから？

他の男とそんなに話すことがいけないこと？

ただの友達なのに…。

人生であなた以外を愛したことなんて家族以外ないのに…。

それでも私を見下すの？

天にも見捨てられ、あなたにも見捨てられた私はどこに行けばいいの？

お願いだから傍においてよ。

私はあなたがいないとダメなの。

私はあなたしか愛せないの…。

だから私に無償の愛を捧げてよ。

あなたに捨てられた私に、どうか無償の愛を捧げて下さい。（後書き）

矛盾はわざとさせてあります。

だからそこは気にしないでください。

主人公となった女の子が矛盾するほど、

狂うほど好きだったということを表したかったので（笑）

都会の中で、永遠にあなたを探し求める。（前書き）

変な内容です（笑）

都会の中で、永遠にあなたを探し求める。

「今日はどこにいるの？」

私は都会の信号待ちでそう呟いた。

彼氏と別れたのはもうずいぶん前。

それは1カ月前だったかもしれないし、それは1年前だったかもしれない。

そんなことはもう、忘れてしまった。

今日も私は都会を彷徨うの。

あなたを探し出すために。

私を置いて、どこかに行ってしまったあなたの残り香を追いながら……。

「どこなの？どこなの？」と呟きながら……。

人は私を怖がるの。

けれど私は気にしてなんかいないから。

あなたと共に過ごすことのできる毎日が、私の下に戻ってくるのならば…。

それだけで、私の中から“恐れ”はなくなるの。

だってそれは、すべてあなたの為だもの。

都会の中で、永遠にあなたを探し求める。
(後書き)

短いすね!?

愛というやつは、俺達の仲を引き裂いた。（前書き）

愛が欲しい…。

愛というやつは、俺達の仲を引き裂いた。

俺は毎日に自惚れていた。

サヨナラすら告げることのできなかった、あなたへの愛。

悪い事ばかりだった、俺達の愛。

それは恋から始まり、痛みで終わった愛。

苦しい毎日。

それは夢中で過ぎて行く。

いつの日だったか？

とても素敵なあなたに出会えたのは。

大切だと思っていた俺達の縁。

その時は、この世界がとても美しく思えた。

君が好きだったものを俺が好きになり、

完璧という日常の中で、俺達は本音を分かち合った。

病気になった俺の身体。

君の言葉に返事ができない。

本当にすまないと思う。

いくら謝っても、俺の人生は戻ってこないのに。

どうしたらいいんだ？

どうすれば幸せを掴めるんだ？

炎より熱い俺の利己心が、俺の魂を焦がしてしまう。

もう、約束できないよ。

もう、俺は神に誓えないよ。

一日中、寂しい気持ちを堪えながら、

あなたから届く手紙を待っている。

あなたの事情に、俺は涙するよ。

この世界でも、俺の声が響くのなら、

俺は誰よりも大きな声で愛を叫ぶよ。

俺の切ない声が聞こえるかい？

仲間たちよ、涙を拭え。

俺は笑っている君の方が綺麗だと思うよ。

そして、本当にごめん。

俺の利己心は燃え尽きてしまいそうだ。

どうしたらいい？

どうすれば俺達の愛は救われる？

約束してくれ。

神にじゃなくて、この俺に。

君はぼつと、一人で立っているけれど、心配しないで。

寂しいけれど、誰でもそうだから。

横を見てごらんよ、君は独りじゃないよ。

昔、君が言っていたように、人生とは本当に笑えるものだよ。

まるで、はらはらする火遊びだ。

夜闇に打ち上げられた悲しげな花火。

悪戯な障害物。 人生という絆。

その全てを心に刻むから。

どうか、みんなで祈っておくれ。

どうか、みんな泣かないでくれ。

愛というやつは、俺達の仲を引き裂いた。
(後書き)

この文の参考は、曲です。
参考にするのも著作権？

HATE YOU・(前書き)

長い長い文字の羅列から、すっきりした横文字に、、
そんな題の変化の中、変わることはない俺自身。。

H A T E Y O U .

私はあなたが嫌い。

『あー全然来ないなあー』

あなたは、私を待たせるだけの存在。

『今日はなくなったのかな?』

そうやって、携帯を見て、デートの中止の知らせを待つ。

しかし、メールも着信も“ 0 ”のまま…。

変わらない、1時間。

変わろうとしない、あなた。

もう疲れたわ。

私はそう思い、あなたに電話をかけるの。

あなたは本当に嫌な人だわ。

何回コールしたって出てくれない。

私の代わりと遊んでいるんでしょ？

あなたを待つには飽き飽きだわ。

あなたと会うのにも理由がない。

あなたと会う必要がないのに待つだけ…。

そんなの、本当にむかつくわ。

あなたのような男は沢山いるもの。

ただ、あなたの欠点が見つからないだけ。

我慢して愛するのには、もう疲れたの。

あなたとの記憶は待っていたってことぐらい。

我慢しても、我慢しても、変わらない孤独。

“愛してる”の一言が聞ければそれでいいのに…。

私とあなたは、無意味なの。

水と油…。

ただそれだけの関係。

交わることはない、永遠の時。

満たされることのない、私の愛。

本当にむかつくわ。

私のプライドを捨てさせておいて、あなたがしたのは何？

私は捨てられた子猫。

私のどこがいけないの？

全てを捧ぐ忠誠心？

私はとても悲しいわ。

私の人生はあなたの為にあるものだと思っていた。

孤独という2文字が、私を苦しめる。

愛という切なさ、私を貶める^{おとし}。

私とあなたの関係を、とても滑稽に思うわ。

あなたは本当に嫌な人。

あなたが開く口の中は、嘘が半分、残りは偽^{いつわり}。

我慢しても、我慢しても、変わらない愛。

いつか、あなたも同じ目に合うでしょう。

傷ついて初めてわかる、私の気持ち。

本当にむかつくわ。

この世にハッピーエンドがないことがよくわかった。

馬鹿みたいに無垢な私。

いつまでも変わることのないあなた。

私は変わることにしたの。

あなたに鎖^{つな}がれる毎日は、もういない。

あなたと出会えただけで、私は幸せだった。

そう思えば、少しは楽なもの。

あなたは本当に嫌な人。

あなたと別れば、心はすっきりするのかな？

骨の奥まで沁^しみ込んだ、あなたとの記憶。

私はこれから、それを背負って生きていくの。

HATE YOU・(後書き)

歌詞の転載はダメなのですが、基にして、違う文を書くのはいいの
でしょうか？

夢中（前書き）

今回はリクエストいただいた、不思議系です。

夢中

深い深い夢の中、

俺は現実的な夢を見た。

俺の名前は、とがしきりようへい 梅敷亮平。

ごく平凡な、中学1年生である。

そんな俺には、ただいま好きな人がいるのである。

名前は、くすみしょうこ 久住祥子。

彼女は実に可愛い。

その顔も、その仕草も、どれをとっても女の子らしい…。

俺はそんな彼女を好きでいる。

そんな俺が、彼女と出会ったのは、6力月前。

俺が話したことがあるのは、2回だけ。

「あの、ちょっとどいてください」

「あの、消しゴム落ちましたよ？」

の2回だけ。

意気地なしのように見えるかもしれないが、それは事実であり、俺は意気地なしなのである。

彼女をただ後ろの席から、ぼーっと眺めるだけ…。

俺はそれで、最高の気分になれるのだ。

人は馬鹿馬鹿しいと言うだろう…。

しかし、それは俺にとっては、それすら恐れ多い事なのだ。

彼女は云わば、学校のアイドル。

彼女を好きでいる人間は実に多く、俺もその中の1人なのである。

そう、俺達の仲にはそれだけの差があるのだ…。

だから、臆病で意気地なしな俺に、声なんてかけられるわけなかった…。

そう、、、

あの日が来るまでは…。

深い深い夢の中、

俺は小さな妖精に出会った。

「とがしきい〜」

「お前、今日暇？」

こいつは俺の友達、さいとうすべる斎藤優。

俺をどこかに誘おうとしているらしい…。

しかし、俺は都合があつたので友達からの誘いを断った。

俺の生活は、あの夢を見て一変した。

みんなからモテるようになり、人気者になることができたのだ。

それがあの夢のおかげかは、わからない。

しかし、あの夢の後に、俺の生活が変わったということだけは言える。

俺が夢で見たのは、小さな妖精。

そいつは、緑の髪で赤い目。

そして青の服を身に着けていた。

俺はそいつに「夢は何？」と聞かれ、「祥子と結婚すること」と言ってしまった。

叶うことのない夢…。

俺はそんな戯言^{たわごと}を妖精に言ってしまった。

しかし、妖精は何食わぬ顔で答えたのだ。

「わかったわ」

「あなたの夢を叶えましょう」

「ただし条件があるわ」

「それはあなたの　よ」

つと　。

「あなたの　よ」の部分は覚えていないが、妖精ははっきりと「あなたの夢を叶えましょう」と言った。

俺が思つに、夢の内容を1／10まで把握している人間はいないだろう。

俺のそれと同じである。

だから、俺はその夢を意識することなく、朝を迎え、そして学校に向かった。

すると、外見からは何も変わらない俺…。

しかし、内側が変わっていたのだろうか？

俺は一夜にして、人気者になった。

俺は、そういったものになれたことに舞い上がり、祥子からの交際の申し入れを受けたのである。

この俺が？

そう、、、

この俺である。

俺は人気者というポジションに成り上り、告白された。

それが、俺の夢に向かったの第一歩だった。

だから俺は、優からの誘いを断った。

なぜなら、その日はデートだったから…。

祥子とのデートだったから…。

時は満ちる。

俺と祥子の結婚式…。

俺は格好よくキメテ、祥子とキスをした。

永遠という鐘が協会に鳴り響く…。

その時は、そのように思えた…。

深い深い夢の中、

俺は不思議な不思議な夢を見た。

俺の人生を告げる夢。

悲しいけれど、俺の最後。

「それはあなたの命と交換よ

」

夢中（後書き）

どうでしょうか？

短いと思います…。

すみません。

短編なので短いですが、それでもいいならクエストください^^

俺は変わらない愛を持ち続けることで、大切な何かを失った。(前書き)

題名は適当です(笑)

俺は変わらない愛を持ち続けることで、大切な何かを失った。

次の一言で、俺達は終わってしまう。

君はどこに行くのか？

君はどこに行ってしまうのか？

俺は君を想い、涙を流すことになる。

君が乗ってしまった列車には、俺の影はどこにもない。

「さよなら」ってことを君は音に出さずに俺に伝う。

次に会う約束もしないで、君はどこに行くのか？

最後まで、不機嫌な顔で俺を見つめないでくれ。

今更になって、今更になって、別れたこと今気付くなんて、、

お互い同じ場所を目指し、間違いはないと、手を繋ぎ合わせたけど、

気付かぬ間に、君の手を俺は振りほどいていたね。

違う道を選んだあなた、もう後戻りはできないから、

大粒の涙を浮かべたまま、君は足跡を残すように行ってしまった。

どこまでも、馬鹿な俺。誰よりも、愛してる。

ねえ、俺は、君のどこかで生きてますか？

会いたくて、会いたくて、

会えない中でも、会いたくて、、

君へ道しるべを、今示してよ。

春は桜の下で誓って、夏は海で過ごしたね。

秋は優しくて風も薫る、冬はより2人距離も狭く、、

ありきたりの場所に行き、ありきたりのデートをし、

ありきたりの終わりを迎えた、ありきたりの2人。

当たり前が幸せすぎたから、当たり前になんか離れられない。

そんなことはわかっている事実。

けれども、不安の中で生きる俺達2人。

恋をして、恋よ去れ。

愛を唄い、愛よ滅べ。

そっと、恋人を抱き寄せることもできない俺。

その情景は、いつまでも変わらずに、

俺達2人は、愛をゆっくりと失っていく。

どこまでも、馬鹿な俺。誰よりも、好きでした。

ねえ、俺は、君のどこかで生きてますか？

会いたくて、会いたくて、

会えない中でも、会いたくて、、

君へ道しるべは、後どれくらい？

話せばいつも分かり合う2人だった。

ただ、言葉足らずが絶えずに、また、別れを繰り返すばかり…。

無条件で別れなければならぬ無常さ。

手を伸ばすこともできない、臆病な俺。

いつの日のリングは、どこかに置き去りのまま。

最後になるけど言わせてよ、「イママデ、ホントニアリガト」

忘れることのできない恋。

変わることのできない愛。

俺は今、君に何も言えなくて。

ただ、それだけで、、

俺は変わらない愛を持ち続けることで、大切な何かを失った。（後書き）

曲を参考にしましたが、変ですね。
すみません…。

呪いのチェーンメール（前書き）

今回は、チェーンメールが題材です。

またもや変な文ですが、宜しく願います（^^

呪いのチェーンメール

皆さんは、呪いのチェーンメールをご存じでしょうか？

それは、人を殺す薬…。

そういわれるものの類です。

しかし、“ただの薬”と言うのには少し、語弊がありますか、
正しく言うならば、それは“呪いの薬”なのです。

『人が人を呪い殺せる』

それがこのチェーンメールのキャッチコピー。

あなたもおひとついかがです？

人が人を呪い殺せる魔法薬を

／／／

ここはある地方の村である。

人口の大半は老人で、私はその村で少数派に当たる子供である。

『呪いのチェーンメール』

この言葉が私の耳に入るのは、まだずいぶん先のこと…。

だから私も知らないで、無邪気に村で遊んでいた。

ある日のことである。

私は村を出ることになった。

若者の人口が少ない…。

これが原因で、学校が無くなったからである。

名残惜しいが、私は隣町に引っ越すことにした。

転校初日、

私はクラスの皆に「よろしく願いします」と大きな声で伝えた。

私は、もともと明るい性格であつたためか、クラスの輪すぐに入ることができた。

そして、転校から約一月、私には長岡香澄ちゃんという親友ができた。

学校では一緒に居て、家に帰ってからメールで会話。

現代人に代表できる、意思疎通の仕方…。

私は田舎の子から、都会の子に変わってしまった。

田舎にいる時は、ケータイなどという代物は持っていなかった。

しかし、都会というものが私の生活を変えた。

時は流れ、私はそんな中学生生活を卒業し、高校生となった。

そんな私の周りを取り囲むのは、いわゆるギャル。

そんな中にいる私もギャル。

私はギャルメイクに、少し流行に逆らってルーズソックス。

そんなファッションで学校に行っていた。

そんな人間ばかり集まる学校なので、周辺からは『金を払えば行ける学校』といわれていた。

今更、田舎の生活なんて思い出したくもない。

はっちゃけることもできないし、田舎なのでプリの一つも存在しない。

そんな私は、親から馬鹿にされ、世界から馬鹿にされていた。

そんな私の平凡な人生に流れ込んできた、一通のメール。

「あなたは嫌いな人間がいますか？

このメールを読むと人は呪われます。

呪われたくないのならば、読まないでください。

まず始めに、嫌いな人を想像してください。

あなたはその人が、今何をしていると思いますか？

自分の好きな人とデート？

金を使い、好きなものを買っている？

苦しみの中で叫んでいる？

誰かにさよならを言おうとしている？

さて、その誰かとは誰でしょう？

あなたが嫌いな人はあなたを憎んでいる。

あなたを殺そうとしている。

さてあなたはどうしますか？

最後に、このメールを3人の人にお送りください。

そうすれば、あなたの思い通りに行くでしょう。

「

私は、世界を想像した。

世界は、私を馬鹿だと言う。

それは事実かもしれない。

けれど、私も1人の人間である。

「馬鹿」と言われれば頭にくるし、傷つきもしたりする。

だから私は、世界を想像し、そして誰もいない部屋で呟いた。

「あーあ」

「世界なんてなくなっちゃえばいいのに…」

これが馬鹿なことだということは、わかっている。

けれど、この時ばかりは言わずにはいらなかった。

その理由は、つい10分前に親と喧嘩したからである。

「なんでお前はいつもいつも、」

私だって、怒られたくてしたことではなかった。

友達と遊んでいたら、深夜徘徊で捕まった…。

それで、何回か警察にお世話になり、その件で怒られた。

友達に誘われたら、OKを出さないといけない。

そうしなければ、二度と遊びになど誘ってくれない。

だから、私はOKを出したのだ…。

それなのに、、

それなのに、、

涙が止まらなかった…。

けど、悲しくなんてなかった。

ただ、自分が惨めに見えただけ…。

ただ、それだけだった。

苦しい。

私の心が、そう訴える。

辛い。

私の心が、そう叫ぶ。

もう嫌だ。

私の心が、そう泣くの。

誰か助けてよ…。

誰か助けてよ…。

誰か助けてよ…。

私はそう思いながら、メールを3人に送った。

決して、返信は来ない…。

私が世界滅亡を望んだから。

私の願いが叶ったのだ。

誰にも、何も言われない世界…。

そういったものを、私は創造したのだ。

呪いのチェーンメール（後書き）

終わりが変で申し訳ないです。

＜だいすき＞の重要性。。。 (前書き)

十二月、四文字の言葉、鍵

の三つで書きました^^

小説の予定でしたが、すみません、、

＜だいすき＞の重要さ。。。。

君の行ってしまった、あの十三^{せかい}月。

俺にはまったく見えないよ。

悲しまぎれに、夢は見るけど、

俺は一年、君はアルファ、、、

そんな毎日が嫌になって、君を想い、刹那に心へ。

けれど、見えない、聞こえない、感じない。

君の想いは、中で感じる。

君の心は、閉まったままで。

愛おしいほど、求めてしまう。

愛おしいから、求めてしまう。

君は何処で何してる？

『死んじまいたい』

それが願い。

『君に逢いたい』

これが本望。

なのに何故か、苦しくなるよ。

心が痛い。想いのほどに。

俺は涙を拭えない。

君に触れることもできないからね。

“ たいよう ” みたいな笑顔が好きで、 、

そんな君を求めて、ひたすら進む。

君に向かって、猪突猛進。

『 笑顔が見たい 』 それだけで、 、

心のドアは、閉まったままで。

俺にはできない、術^{すべ}がないから。

鍵穴は錆びつき、鍵もなくて、、

『君に逢いたい』　それだけで、、

いつか俺にも見えるかな？

死に様覗かせ、死後の^{せかい}十二月。

君の住^{せかい}んでる、あの^{せかい}十二月。

時は止まり、老いはない。

涙はあつて、俺いない。

“だいすき”だけは、言わせてよ、

生きてる間に、言えなかったけど。

それが、俺の全てだから

＜だいすき＞の重要性。。。 (後書き)

今気づいた。

この短編集、謝ってばっかだ…。

だけど、言わせておくれ。。。。

ヘンですみません^^

遙か

僕が君に恋をしたのはいつだろうか？

それは、成人式。

僕はそんな20歳という区切り目で、
“君への想い”を思い出した。

「和穂^{かずほ}はさ、今日ヒマ？」

僕は、クラスで友達と話す君を眺めていた。

もともと友達が少ない僕には、君がとても羨ましく思えた。

それは、君がクラスにとって必要な存在だから…。

それは、君が僕にとって必要な存在だったからだった。

そもそも、小学校に入学当初から、君は僕にとってアイドル的存在だった。

僕が君と同じクラスになったのは、1年と2年と5年の3年間。

僕は影の薄い存在だったから、君はどうせ覚えてもいないだろう。

それぐらい僕の存在は小さくて、君の存在は大きかった。

そう、、、

君をアイドルと思っていたのは僕だけじゃなく、学校全体がそうだった。

君は誰が見ても可愛らしかった。

街1つ歩けば、誰もが振り向く存在で、それは高校になっても変わらなかった。

そう、君は気付いていたかな？

僕と君は、中学こそ違ったけれど、高校が同じだったということ

を…。

僕は、君と高校で出逢えてとても嬉しかった。

君とは結局、同じクラスになることはできなかったけれど、それでもいいんだ。

君の笑顔を時々でも見れたんだから…。

僕は、君をいつも心のどこかで追っていた。

それは、好きだから。

大好きだったから。

君が可愛いというより、綺麗に変わった高校の時。

そうだな、

確か、2年の夏だった気がする。

とにかく、それぐらいの時に、君に彼氏がいるという噂を聞いたんだ。

とても悲しかったよ。

けれども、嬉しいとも思えた。

だって、君が幸せになれるんだから…。

君が幸せを掴もうとしているんだから…。

だから、僕は陰ながら応援することにしたんだ。

けれど、その噂は所詮、噂でしかなかった。

そう、君には彼氏がいなかったんだ。

僕は『なぜだろう？』と思った。

昔、君は好きな人がいるということを聞いたことがある。

それも噂だけれど、それが本当ならば、君はその人のことをずっと思っているのかな？

それは誰なんだろう？

僕と同じで、君も片思いをしているんだ。

僕は、少しの時間を刻み、理解した。

僕は君の前に立つ勇氣はないけれど、君の背中を押すことはできるということを。

けれど、気が付けば時間は早く進んでいた。

成人式、

それは、僕を高校以来に君と引き合わせてくれた。

結局、君の背中を押すこともできなかった惨めな僕。

そんな僕の隣には、小学校と中学校が一緒だった晃あきらしかなかった。

けれど、君は違った。

君の隣には、たくさんの人がいた。

『ああ、僕もあそこに交じればいいなあ』

僕はそう思ってしまった。

だから、僕は君への想いを思い出してしまったんだろう。

『 大好き 』

これは僕が心の中で、君に何度も描いた想い…。

伝えることのできなかった、決して伝えようとしなかった、頑固な汚れ。^{おもい}

けれど、今の僕は、君に向かってこれから言っだろう。

君に向かって、一歩踏み出したんだから…。

）
F ・ I ・ N
）

遙か（後書き）

「終わりになき恋」になんとなく似てる気がする。

いつか続きが書きたいね…。

人は嘘つき、君は自己中、私は邪魔者、夢い絆（前書き）

変わった作品を作ってしまった。

何なんだろう？

人は嘘つき、君は自己中、私は邪魔者、儚い絆

人は皆嘘つきである。

長く連れ添った相手も、簡単に嘘をつく。

君はどうだろうか？

今まで生きてきた中で、嘘をついたことが一度もないだろうか？

自分は少なくとも、ある。

それは、たとえ冗談と言える質のものだろうが、嘘は嘘なのである。

もし嘘をついたことがない人がここにいたとしよう。

その人は、これから先、嘘をつかないだろうか？

そう、、、一度でもある。

絶対と言っていいだろう。

人は生きている限り、人を騙すのである。

絶対に、かつ真理的に。

しかし、そういつている自分はどうか？

嘘をついた揚句、人を信じることもできない。

そう、、人は人を信じることなどできないのである。

それは、どこかに“疑い”という防衛本能が働くから…。

それもあるだろうが、結局は他人事なのである。

自分は嘘をつかない。人を信じれる。

それは偽善であり、ありえない事なのである。

そう、、所詮は戯言でしかないのだ。

結局、私の言いたいことは、人間は嘘つきで、人は人を信じれないということ。

しかし、人を信じないことは、決して悪い事ではない。

それには、自分を守るという行為も入っているからである。

*

*

*

「来週の月曜は、みんなで打ち上げしようね」

「さーちゃんも来るでしょ？」

そう、私に声をかけてきたのは、3年間を同じクラスで過ごした、
あいばかなほ
相葉香奈穂。

私達3年生は、来週の月曜で、並河中学校を卒業する。

それは、もう最後になるかもしれない、みんなとの集まりの日。

だから、私も行くことに了承した。

行かないと、もう会えない気がして。

だから、私、みずたにさえ水谷紗枝は参加することにした。

しかし、約束の日、約束の場所に着いて、いくら待っても、1時間待っても、みんなは来なかった。

どうしたんだろう？

私はその当時、携帯を持っていなかったので、連絡も取れずに周りをうろつろした。

しかし、いくら待っても来なさそうだったから、私はトボトボと帰ることを選択した。

けれども、選択^{それ}のせいで私は余計なことを知ってしまう。

幾分か歩くと、私はたまたま香奈穂ちゃんに会うことができた。
というより、近くを歩いていた。

私の数十m先、香奈穂ちゃんたちは笑いながら歩いていた。

おかしいな？

みんなはどうやって集合したんだろう？

私はそう思った。

しかし、香奈穂ちゃんとは私が思ってもいなかったことを口にした。

「やっぱあ、紗枝連れてこなくて正解だったよね」

「あいつ、ノリ悪いから、いろいろとメンドーんだよねえ」

「そう思わない？」と。

正直、悔しかった。

私は、友達だと思っていた。

それも、仲のいい親友だと。

けれども、香奈穂ちゃんは、、

いいや、香奈穂は私を邪魔者だと思っていた。

卒業式だから、もう会わないから、私を誘うだけ誘って、待ち合わせに行きもしない。

私など、不要な存在だったのだ。

そう思われるのが、、

いいや、そう思われたのが悔しかった。

けれども、もういいんだ。

所詮は人間関係なんて、それだけの絆なんだから。

永遠だと思っていた私の人生

私の手は、君に触れるためだけにあつて、
私の指は、頬を感じるためにだけにあつて、
君を見つめる幸せを、日々の中で探し続けた。

輝く星は、私達を見つめ続けるためだけにあつて、
照らす太陽は、一緒にいることを証明するためにあつて、
私と君は、夜に空を見上げて笑ってみせるの。

挫けてしまいそうな日は、いつも君が傍にいて、
悲しい時は、君が隣で笑ってくれていた。
でも、今はその君がいなくなってしまったんだ。

涙が零れ落ちて、手のひらから溢れ出そうとする時、
塞き止めることのできない辛さも、流れ出してしまうんだ。
だから、私は今夜、空を見上げて泣いてみせるの。

君に愛されたから、君が愛してくれたから、
私は私になれて、私は私として生きることができた。
季節を運ぶ風よ、悲しみを拭い去って、君を永遠に留めてよ。

あの頃に聞いていた、二人のラブソングも、
今では寂れた街角に流れている、ただの廃音になって、
君の面影がそこにあると思うと、涙が零れ出てくるの。

昔、不意に君と目が合って、唇を重ねあわせて、
愛し合って、君を思い続けて、涙を流して、喧嘩をして、
仲直りして、君を好きになって、君は守るって言ったのに。

青白くなってしまった君の顔、雲一つない青空、
君との思い出は、空の彼方に消えてしまったようで、
張り裂けそうな私の胸を、ただ君に抱きしめて欲しくて。

あの時、素直にありがとうって言えていれば、
今こんなに後悔することなんてなかったのだろうか？
目覚めたら、これが全て夢だったってことはないのだろうか？

街で道行く人ごみをぬって、君を探していると、
君と眺め歩いた景色に辿り着いてしまって、
君のことを思い出して、私は何度も涙を流すの。

ポロポロ零れ出る涙の数だけ、私は君を愛していたのかな？
私の愛は、君に伝わっていたのかな？
言えなかった言葉も、言い続けた言葉も、届いていたのかな？

二人の恋のお話（前書き）

リクエストいただいたものです^^
では、よろしくお願いします。

二人の恋のお話

よくある街の古本屋。

私はそこに本を買いに行ってみた。

その理由は、学校の宿題で《読書感想文を書け！》っていうのが出たから…。

正直、『高校生にもなって、読書感想文はないっしょ…』って思っている私だけれど、そんな私の気持ちなど、先生は反映してくれるわけではない。

でも、『めんどくさい』とやめてしまうのは私らしくないっていうか、好きではないので、私は仕方なく古本屋に向かうことになったのだ。

でも、なぜ本屋ではなく古本屋かというと、その答えは実に簡単で《お金がないから》であった。

なぜなら、私には親がない。

去年、両親とも交通事故で死んでしまった。

しかし、私には小学生の妹がいる。

だから、一生懸命バイトして、残り一人の家族を養っているわけだ。

幸いなことに、住む場所はあるし、両親は貯金もしてくれていた
ので、今のところ窮屈な生活はしていない。

でも、だからと言って贅沢をできるほどの余裕もない。

だから、バイトをして、高校だけは卒業できるように頑張っている。

そういうわけで、古本屋にやってきた私。

『何の本を読もうかな？』

別に学校の図書室で借りるっていうこともできたけれど、今は夏
休みではないので、長い間借りることはできないし、買ってしまった
は私のものになるので、妹に読ませてあげることできる。

だから、私は買うことを決めたのだ。

でも、難しい本では妹は理解できないし、私としても、そこまで
はしたくない。

だから、私は、『ある程度わかりやすく、勉強になる本』を買お
うかな？ってことで、本を探すことにした。

何分かして、私は、《これにしよう！》っていう本を決めた。

「すいません、これください！-！」

私はそう、店員のおじいちゃんに言うと、「１００円じゃな……」
とそのおじいちゃんは言った。

「え？この本は２００円……ですけど？」

私は、お金を知っていて誤魔化すのは嫌いなので、ちゃんとした
ことを言った。

「そうじゃな……確かにそうじゃ……」

「しかし、今は１００円じゃ……」

「もともとその本は、いい作品ではあるがなかなか売れなかった
のでな……」

「それに、今どきの子がそういった本を読んでくれるのは嬉しく
てな……」

「……だから、１００円じゃ-！」

そうおじいちゃんが言うので、「いいんですか?」と聞いてみた。
すると、「うむ、もちろんじゃ!」と言ってくれたので、私は1
00円だけ払って帰ることにした。

『ラッキー!いいおじいちゃんだったなあ』っと思い、浮かれ
ながら帰ろうと古本屋から出ようとした時、

ふと、毛むくじやらの猫が道路の反対側を歩いているのを発見し
た。

そして、その時、『あ!可愛い!』と、決して普通の人なら思
わないことを、私は思った。

だから、『この後暇だし、追いかけてみよ!』っと思って、私は
道路を渡った。

しかし、幾分かして、いくつかの角を曲がった後に、猫の姿を見
失ってしまった。

「どこに行ったの」

「ケム君、出ておいで」

と、勝手に“ケム君”と付けたあだ名を呼んで、私は毛むくじやらの猫を探した。

けれど、何処を探してもいない。

私は少し残念がつて、「はあゝあ」とため息を吐いてみた。

『なんで、いなくなっちゃうのかなあ……』

私は内心、そんなことを考えながら、家に帰ることを決めて、信号のない交差点を右に曲がる。

いいや、右に曲がろうとしたんだ。

でも、「いったあ……！」っと気が付けば、人にぶつかっていた。それは、私も下を向いていて、私にぶつかった彼も、下を向いて歩いていたら……。

だけど、私はケム君に逃げられた腹いせもあって、少しカッとなつて文句を言っていた。

「ちゃんと、前を向いて歩きなさいよね……！」と。

でも、向こうも悪気がないのはわかっている。

だから、向こうから謝ったら許そうかと思っていた。

しかし、顔を拝見してみると、そのぶつかった人は、知らない人ではなかったのだ。

というか、むしろ知っている人で、、同じクラスの男子だった。

「え？ まさか…」

そうやって、思わず出てしまった言葉。

私のぶつかった相手は、私の好きな人だったのだ。

そう、、私とて立派な？高校生なのだ。

だから、好きな人の一人や二人、いても可笑しくはないのだ！

そういうわけで、好きになってしまった人にぶつかった私。

『どうしたものか？』

そう一瞬考えたが、そんな時、「ごめん」と言われた。

「え？」

“ボケー”としていた私にとって、その言葉は意外過ぎた。

『悪いのは私なのに……』

そう思ったから、私は咄嗟に謝り返した。

「私こそ、ごめん」

「私、今まであなたのことが好きだった」

「「え??」」

その言葉は二人が放った。

私とて、そんなこと言うとは思っていなかった。

だから、言われた向こうもビックリしただろう。

でも、もっとビックリしたのが、片思いじゃなく、両想いだった
ということ。

想いは実って消えていくもの。
それは一人だった時のお話で、
これは、二人の恋のお話。。

いつもの場所と、変わらない道標

私はあなたが大好きです。

ただひたすらに、まっすぐ生きるあなたが、

昔の私を、今の私に変えていつてくれた。

私はそんなあなたが大好きです。

雨に打たれても、風に吹かれても、

決して挫けぬ、その力強い勇気と眼差し。

私はそれに惹かれて、あなたを追うことを決めました。

あなたに出逢わなければ、諦めていた夢もあつたでしょう。

あなただから、私は笑って乗り越えることが出来ました。

愛に出逢って、愛を信じて、愛に破れて、愛を蔑む。

愛を憎んで、愛を赦して、同じ愛を、また知ることでしょう。

愛と別れ、愛を求め、大切という言葉を、実感するのでしょうか。

私はあなたを想うことができますのです。

私だけに見ることのできる、あなたの良い面と悪い面。

そして、それを注意しようとする、強い決意と志。

私はそんな風にあなたを想っています。

痛くても、辛くても、決して諦めない、根性と気合い。

あなたが勝つときに得た、あの喜びと憂い。

壊れても、支えるから、ずっとずっと走っていて欲しい。

あなたに出逢い、あなたを信じて、あなたに破れて、あなたを蔑む。

あなたを憎んで、あなたを赦して、同じあなたを、また知ることでしょう。

あなたと別れ、あなたを求め、大切という言葉を、実感するのでしよう。

私にとって、あなたは人生の道標で、

あなたがいるから、私は歩むことができる。

それだけで、私は幸せを感じ、

再び、希望を持って歩むことができる。

だから、変わらぬ心で、あなたはいつもの場所にいて欲しい。

嘘と記憶、 悲しいままで。 (前書き)

超久々の更新。
なんだか、忘れていたわけではないんですが、更新がおろそかにな
っていました。
すみません。

嘘と記憶、 悲しいままで。

お前の隣でいつも過ごしていた俺。

お前の横では時は早く進み、離れれば離れるほどゆっくりになっ
ていく。

これから叶える夢もあるし、俺は俺であり続けるために、永遠と
いう時を君に捧げるつもりだった。

《俺はお前にだけは嘘は吐かない》

お前は知らないだろうけど、それは、昔一人で決めた約束。

でも、お前は俺に何度も嘘を吐くんだ。

傷ついて我慢を繰り返しても、何も進まない世の中という名の現
実は、俺に苦勞という重荷ばかり投げつけてくる。

でも、それでも記憶は俺を呼び起こし、「キミヲキライニハナレ
ナイ」と叫ぶ。

愛を偽られても、愛を失ったとしても、俺は君だけを愛していた
のに。

君は俺だけをこの場において、何処かに消えてしまっただ。

離れていく背中、失っていく記憶。

そのどれもが俺に惨劇を見せようとしている。

それでも、俺は君に告げようと「キミヲクライニハナレナイヨ」という言葉を発する。

涙を流している俺が憎いか？

涙を堪えようとしない俺がウザいか？

本当に俺達はこのまでの関係なのか？

嘘だ！ うそだ！ ウソだ！！

夢なんかじゃない。 あれは、一つの確かな記憶。

いてもいいんだよ？ ずっと、俺の傍だけに。

どうか、俺を切ない記憶の中に、閉じ込めないでくれ。

例え、何処の誰が何て言っただとしても、正々堂々とした人生を送った俺。

お前はいつも間違いばかりを繰り返すけれど、俺はそれでも愛していた。

過ぎた日を思い出すと、君の懐かしい、声と香りが甦る。

考えるだけで思いのままの世界。

俺は今までどうして、毎日独りのどん底で君を求めたのか？

心は覚めてしまったけれど、君への想いは変わらないまま。

だから、前に進むことはするけれど、いつまでも俺は君を待っているよ。

嘘と記憶、 悲しいままで、 (後書き)

ちなみに、次話更新の予定も入ってはいませんので、その点をご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422u/>

尖角の超短編集//第二弾！！

2011年11月26日20時55分発行